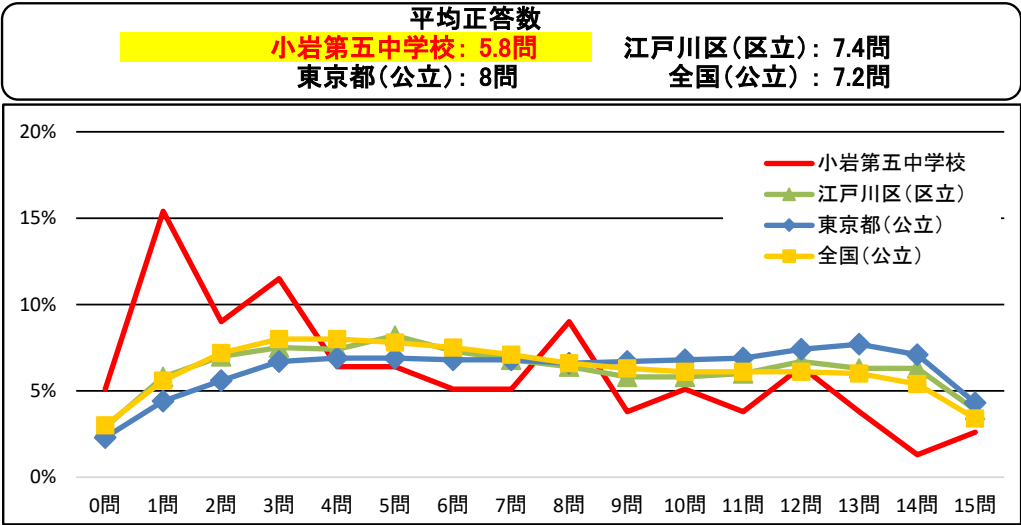
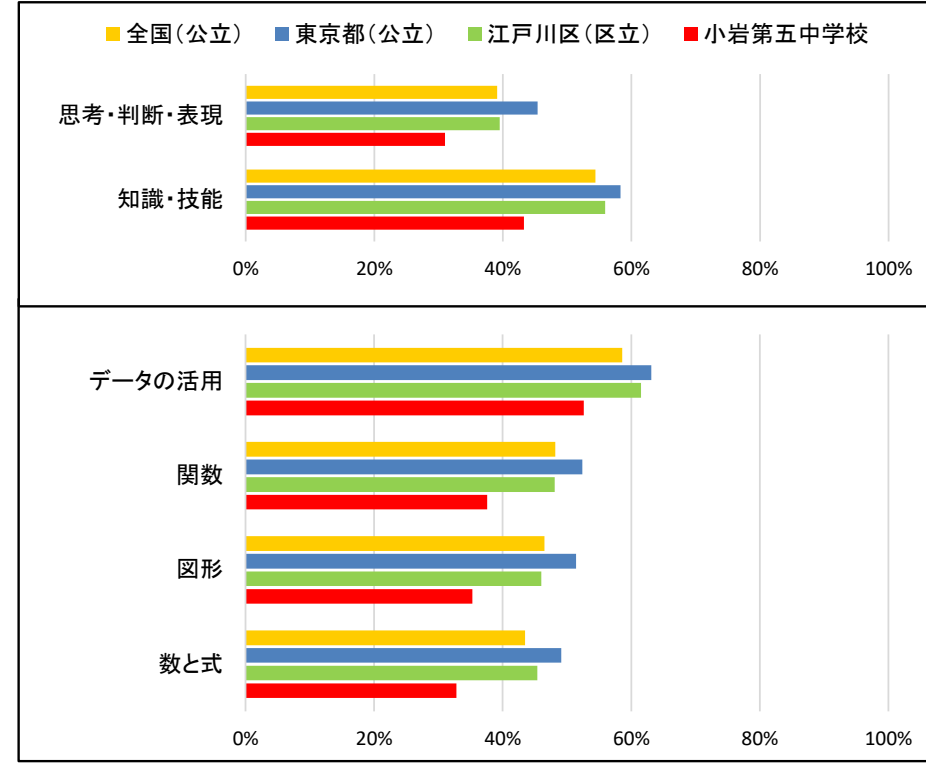


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【数学】江戸川区立小岩第五中学校

正 答 数 分 布



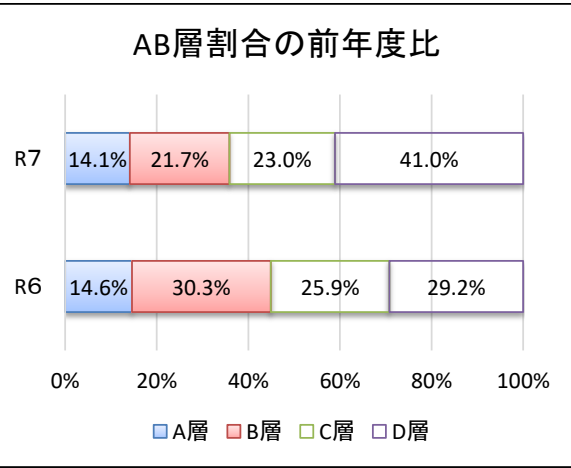
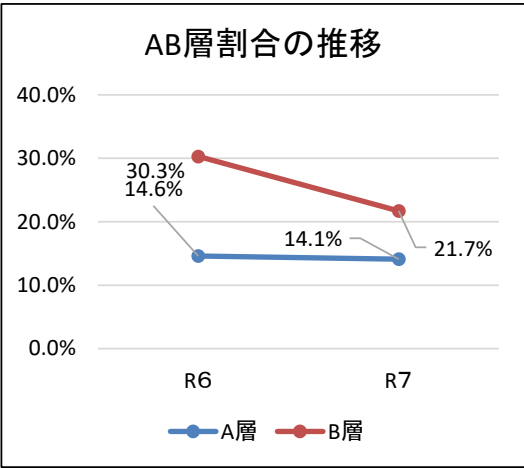
「領域別」の結果



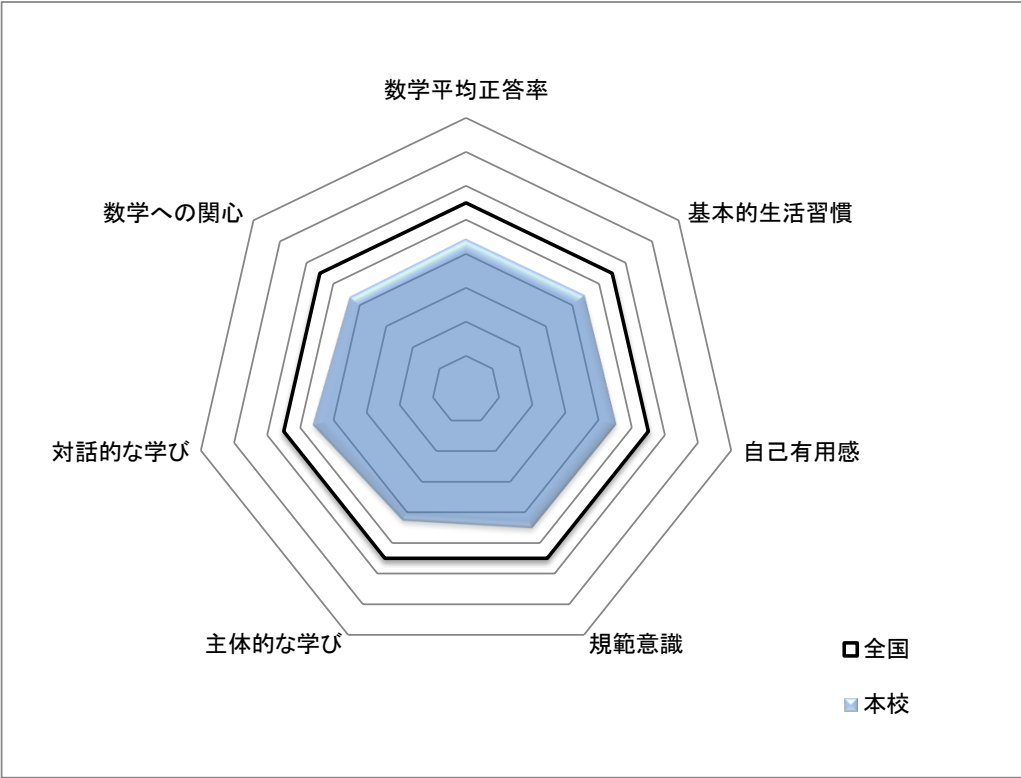
四 分 位 に お け る 割 合 (都 全 体 の 四 分 位 に よ る)

数 学	上位 ← → 下位			
	A層 12～15問	B層 8～11問	C層 4～7問	D層 0～3問
小岩第五中学校	14.1%	21.7%	23.0%	41.0%
江戸川区(区立)	23.2%	24.0%	29.6%	23.2%
東京都(公立)	26.5%	27.0%	27.5%	19.0%
全国(公立)	20.9%	25.1%	30.2%	23.8%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、生徒数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の生徒の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各 領 域 に お け る 、 全 国 平 均 正 答 率 及 び 、 全 国 の 肯 定 的 回 答 合 計 値 を 基 準 と し た 場 合 の 、 本 校 の 様 子 。



《チャートの特徴》
本校生徒の学力は、深刻な遅れがある。平均正答率は38%にとどまり、全国平均を10.3ポイント下回った。特にD層は41.0%と全国の約2倍に迫り、基礎学力未定着の層が厚い状態である。観点別では「思考・判断・表現」が31.0%と低迷し、「知識・技能」との大きな差があり、知識の活用力に課題が残る。加えて、主体的な学びや自己有用感も全国水準に届いておらず、学力の伸び悩みと学習意欲の停滞が、相互に強く影響し合っている状況である。

《家庭・地域への働きかけ》
学校は調査結果や日々の課題提出状況を家庭へフィードバックし、学習実態の共有を図る。その上で保護者には、復習することの大切さを説明し、基礎学力定着のための習慣を作る課題についての対話の機会を求めたい。日常の中で思考・表現力を育み、家庭と緊密に連携しながら、基礎学力の定着を粘り強く支えていく所存である。

《現状把握》
本校の平均正答率は38%で、都平均を15.0ポイント下回る深刻な結果となった。D層は41.0%と全国の約2倍に迫り、基礎学力に危機感を覚える。特に「数と式」や素数、一次関数の理解不足が顕著である。また、記述問題の正答率19.2%、無解答率33.3%という数値が示す通り、論理的思考力と表現力や挑戦しようとする力が欠如している。背景には、生徒の自己有用感の低下と学習習慣の停滞がある。これらが複合する現状を、学校全体の喫緊の課題として受け止める必要がある。

《学校の取組》
・教員の指導力向上
指導力向上の要は、生徒の「わかった」、「できた」という実感を引き出す授業づくりにある。特に、課題である「思考・判断・表現」領域の育成に向け、教員主導の解説から、生徒が自ら考え、表現する場面を重視した授業を現在より多く取り入れる。基礎的な理解に課題を抱える生徒に対しては、個々のつまずきに寄り添った細かな支援を徹底する。授業内で小さな成功体験を積み重ねることで数学への苦手意識を和らげ、自己有用感をはぐくみながら、一人ひとりの可能性を粘り強く伸ばしていく。

・基礎学力の保障
第一に、知識・技能領域でのつまずき解消である。基礎的問題の低正答率を踏まえ、補習やデジタル教材を活用し、特にD層には既習範囲まで遡った指導を行うことで基礎学力を保障する。第二に、表現力と論理的思考の育成である。記述問題の弱さ(19.2%)に対し、単なる計算に終始せず、解法の根拠を説明させる活動を、適宜授業に導入する。思考過程の言語化を通じて論理性を養い、このプロセスを主体的な学びと学習習慣の確立へと直結させていく。

・学習習慣の確立
学習習慣の確立には、最も低調な「数と式」の反復を日常化させ、基礎を固めることが出発点である。そこから、課題である記述力強化に向け、生徒が得意な証明の「型」を活用し、論理を構成するトレーニングを日々の学習に組み込む。解法を自ら言語化し、見通しをもって課題に向き合う「質の高い学習」へ変えていきたい。この積み重ねを通じて、計画性や自己管理能力を高め、主体的に学び続ける姿勢を生徒一人ひとりに根付かせていく。

・AB層の育成
上位層育成の最重要課題は、都との大きな差のある「思考・判断・表現」領域の克服にある。記述問題の高い無解答率は、自由度の高い設問に対する生徒の強い苦手意識が原因である。この打開策として、生徒が得意とする証明など「型」が決まった問題から導入し、段階的に自らの言葉で論理を構成する記述練習を拡充する。事象を数学的に解釈し、解決プロセスを適切な表現で説明する能力を徹底して鍛え上げることで、確かな学力を定着させ、上位層の厚みを確実に増すことを目指す。